

[成果情報名] 抑制力ポチャ棚栽培の仕立て方法

[要約] 適品種「ダークホース」を用いた抑制力ポチャの棚栽培で、10a 当たり収量を高めるための誘引・整枝法は、親づる 1 本仕立てとし、支柱と棚に沿って誘引し 25 節程度で摘心する。腋芽は全て摘除する。着果節位は第 2 雌花が咲く 18 節前後とする。

[担当] 山梨県総合農業技術センター・栽培部・野菜科・赤池一彦

[分類] 技術・普及

[課題の要請元] 中北普及センター他

[背景・ねらい]

複合経営の補完品目として、良食味の栗系カボチャの晩秋期出荷が期待されている。これまで、本作型の適品種として「ダークホース」を選定し、11 月に収穫し冬至前に出荷するための播種適期や最適な栽植密度を明らかにした（H23 年度成果情報）。

そこで、さらに 1 果重や 10a 当たり収量を高めるための誘引・整枝法や最適な着果節位など仕立て方法について、播種晩限の無加温ハウス栽培で明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 1．親づるは垂直方向に支柱を立て、これに沿って誘引する。水平面に達したら棚に沿って伸長させ 25 節程度で摘心する。親づるから発生する腋芽は全て摘除し、子づるは伸長させない(図 1 -イ)。この整枝法を行うことで 10a 当たり収量や 1 果重が高くなる(図 3 -イ)。子づるを摘除することで、総葉数は減るが棚内の受光条件は良好になる(図 4 -イ)。
- 2．親づるの最適な着果節位は第 2 雌花が咲く 18 節前後である(図 2 -エ、図 6 -エ)。これより前の第 1 雌花が咲く 13 節前後に着果させると、1 果重が軽くなり、10a 当たり収量が低下する(図 5)。

[成果の活用上の留意点]

- 1．本試験に用いた品種は「ダークホース」である。播種晩限期は露地栽培が 8/10（収穫期 11/上旬）、無加温ハウス栽培が 8/20（収穫期 11/中旬）である。栽植密度は、畦幅 200cm（床幅 80cm、通路 120cm）、株間 30cm の 1 条植え（1,667 株/10a）とする。肥料は C D U 等を用い、3 要素成分量が各 15kg/10a 程度となるように施用する。
- 2．定植床には、生育初期の地温上昇を抑えるために白黒ダブルマルチを用いる。
- 3．ハウス栽培では虫媒による着果が期待できないため、親づるに開花した雄花を用い、雌花に人工授粉する。授粉作業は早朝に行う。1 株に 1 果を着果させ、2 果以上としない。
- 4．栗系カボチャは果肉が強粉質で甘みが強い反面、日持ちしにくい。11 月中旬に収穫した果実は、品質を考慮し 12 月上旬頃までに出荷を完了する。

[期待される効果]

- 1．良食味の栗系カボチャを、流通量の少ない初冬期に出荷することができる。
- 2．複合経営の新たな補完品目として、既存ハウスや棚の有効活用を図ることができる。

[具体的データ]

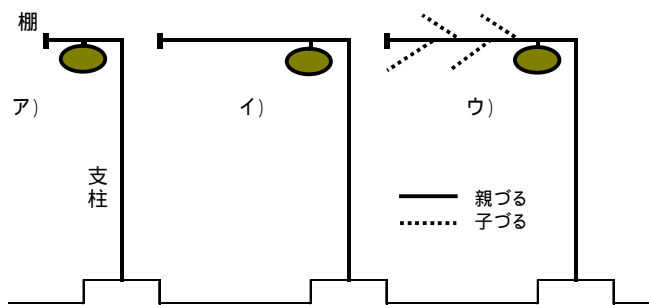


図1 誘引・整枝法

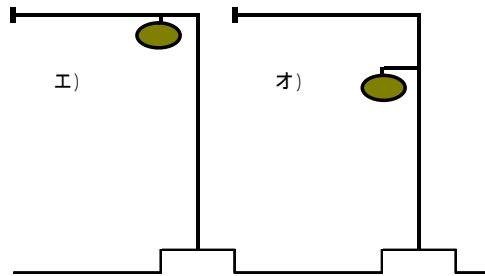


図2 着果節位

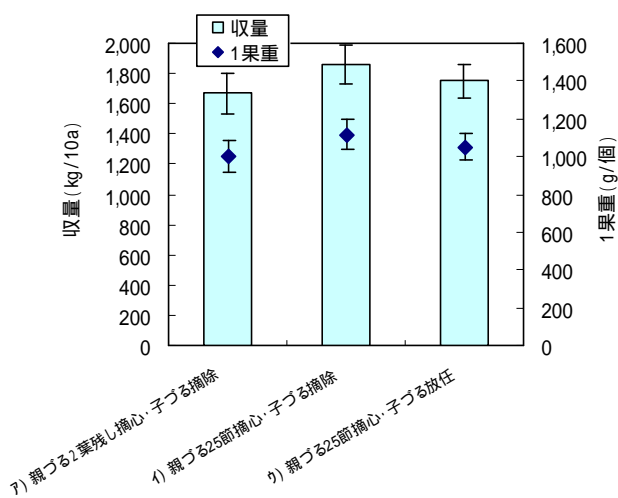


図3 誘引・整枝法の違いによる10a当たり収量および1果重
図中の垂直線は標準誤差を示す。

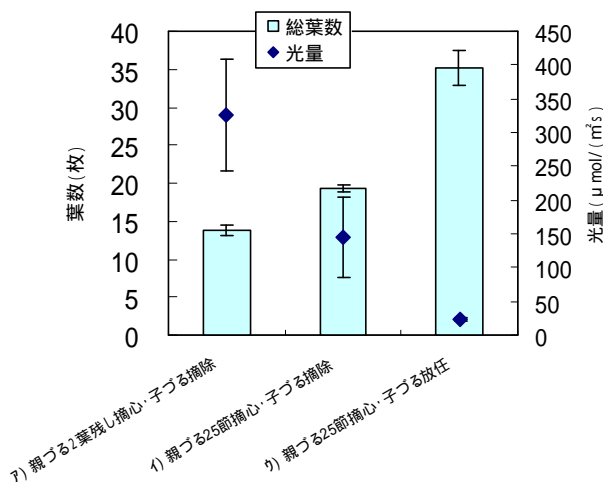


図4 誘引・整枝法の違いによる総葉数および棚内の光量
図中の垂直線は標準誤差を示す。

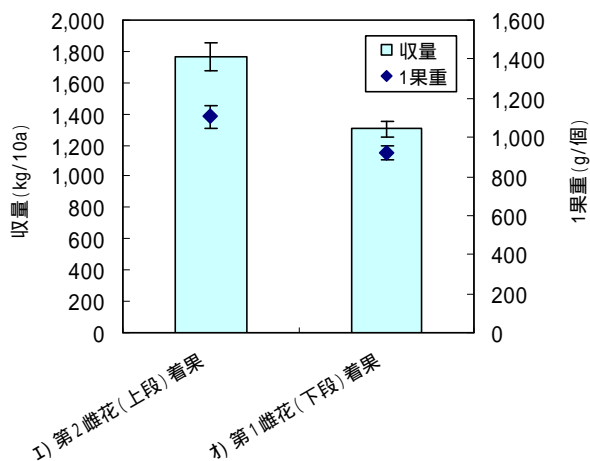


図5 着果節位の違いによる10a当たり収量および1果重
図中の垂直線は標準誤差を示す。

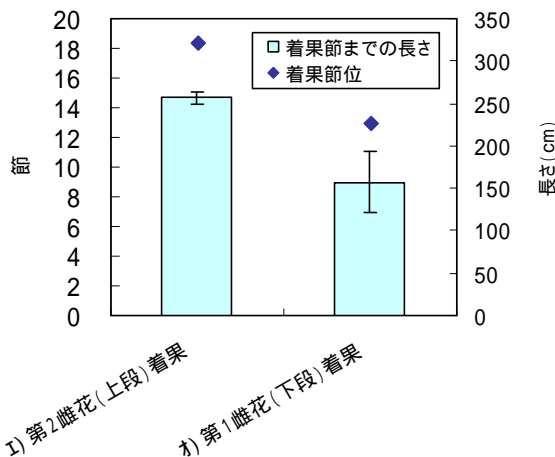


図6 着果節位および着果節までの長さ
図中の垂直線は標準誤差を示す。

[その他]

研究課題名：平坦地における冬期を中心とした省力品目の作期拡大技術の確立
 予算区分：県単
 研究期間：2011～2013年度
 研究担当者：赤池一彦、中村知聖、小澤明子